

Citation: Nasser M, Fedorowicz Z, Ebadifar A. Management of the fractured edentulous atrophic mandible. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2007, Issue 1. Art. No.: CD006087. DOI: 10.1002/14651858.CD006087.pub2.
CRG名: Oral Health

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 1 November 2006
Clib issue No.; N/U: 2008 issue 1; -

背景: 萎縮した無歯顎の(歯の無い)下顎骨(下の顎)の骨折は、高齢者においてかなり一般的である。萎縮および虚弱化は、血管分布の減少と血流の低下の結果として起こる傾向にある。修復と固定の治療法の選択としては、治療の種類に重大な影響をもつ萎縮の程度により、非観血的および観血的手法がある。多くの手法が萎縮した下顎骨の骨折治療に提案されてきたが、どの手法が最良のアウトカムを有するのかについては、未だ不明確である。

目的: このレビューの目的は、骨折した無歯顎萎縮下顎骨の取り扱いにおいて用いることが可能な、非観血的あるいは観血的ないずれかの介入の有効性に関する信頼性のあるエビデンスを提供することである。

検索戦略: 本レビューでは、Cochrane Oral Health Group Trials Register; the Cochrane Central Register of Controlled Trials (CENTRAL) (The Cochrane Library 2005, Issue 4); 1966年からのMEDLINEおよび1980年からのEMBASEをいずれも2006年1月30日まで検索した。最後の検索は2006年の1月に行われた。

選択基準: 外傷、インプラントの埋入あるいは病的骨折による結果として起こったもので、萎縮無歯顎下顎骨の正中癒合部、側癒合部、体部、角部、関節頭部および筋突起部に骨折を起こした55歳以上の人を含むランダム化比較試験。取り扱い(観血的あるいは非観血的修復と固定)の手法を比較したいずれの研究も含まれるものとした。

データ収集と分析: 該当する研究の審査は、2名のレビューアの著者により、正副2通りで、独立して行われた。結果は、連続的なアウトカムに対する平均差および95%信頼区間を有する2分のアウトカムに対するリスク比を用いて、ランダム効果モデルとして表されることとした。異質性は、臨床的および方法論的な両者の因子を含んで調査されることとした。

主な結果: 該当するランダム化比較試験は見いだせなかった。

レビューアの結論: 骨折した萎縮無歯顎下顎骨の取り扱いについて、観血的あるいは非観血的な、どちらか単独のアプローチの有効性に対するエビデンスは現状では不十分であり、高いレベルのエビデンスが得られるまでは、治療の決定は臨床家のそれまでの経験に基づいて引き続きなされるべきであることをこのレビューは示している。

このエビデンスの欠如は、良好なアウトカムを予測するいくつかの従来の標準的な手段において、明快さが確かに欠如しており、明らかな相違があり、また信頼性が欠如しているということを部分的に反映しているかもしれない。

(翻訳 田口 明・監訳 湯浅秀道; JCOHR)
翻訳公開日: 08年4月1日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。

